

若者が国際交流で得られる学び

～アウクスブルク市での異文化体験を通じて～

原田 伊織

はじめに

2024年9月、私は尼崎市青年使節団の一員として、ドイツのアウクスブルク市を訪れました。

この訪問は、普段は触れることの少ない異なる文化の暮らしを体験し、自分自身の価値観や固定観念を見直すきっかけとなりました。

本報告では、アウクスブルク市での具体的な体験を基に、国際交流が若者にどのような学びを提供できるのかを考えました。

1. 現地での体験

訪問先の概要

アウクスブルク市は、ドイツ・バイエルン州に位置し、2000年以上の歴史を誇る文化都市です。この都市には、世界遺産に登録された水道施設や、世界最古の社会福祉住宅「フッガーライ」など歴史の象徴とも言える施設が点在しています。

また、尼崎市との関係も深く、1959年の姉妹都市提携以降、両市は多方面で交流を続けています。その象徴として、市内には尼崎市寄贈の石碑や「Amagasaki-Allee（尼崎通り）」が設置され、日常的に両市の繋がりを感じられる場所が存在します。

今回の訪問は、これらの施設を巡る中で、歴史的背景や多文化共生の重要性を学びつつ、尼崎市との関係性を実感する機会となりました。

多角的な視点から歴史と文化に触れる

アウクスブルク市は、訪れる場所すべてに豊かな歴史と文化が感じられる都市です。特に「フッガーライ」は、世界最古の社会福祉住宅として、現在も人々が生活を営む場となっています。この場所では、福祉の視点から地域社会の歴史的意義を学ぶとともに、建物が持つ文化的価値を体感しました。



(写真：フッガーライの外観)

また、「ノイシュヴァンシュタイン城」を訪れた際には、その壮麗な建築美と豪華な内装に圧倒されると同時に、国王ルードヴィッヒ二世が生み出した独自の世界観や、彼の治世が持つ歴史的意義について考えさせられました。

伝統衣装の試着では、その重厚な生地や装飾を身につけることで、当時の庶民や貴族の生活に思いを馳せる体験ができました。

さらに、世界遺産に登録された水道施設の見学では、当時のまち全体での水管理システムや、自然の力を活用した工夫を知り、技術と生活が密接に結びついていることを学びました。

同様に、テキスタイル博物館では、繊維産業の視点からアウクスブルクの歴史に触れることができ、経済や文化がどのように交差し、発展してきたかを理解する貴重な機会となりました。

「Halle 116」では、戦争の悲惨さを伝える展示やガイドの説明を通じて、過去の過ちを忘れずに未来に伝える重要性を痛感しました。この訪問は、歴史の記憶を次世代にどのように伝えていくべきかを考えさせられました。

教育と職業訓練：現地の同世代

ドイツの教育制度は、日本とは大きく異なり、初等教育終了後、学生は職業訓練を重視する基幹学校や大学進学を目指すギムナジウムなどに分かれる仕組みになっています。

この仕組みは、学生が早い段階で進路を選択することを求められる一方、それぞれの道で専門性を高められる利点があると伺いました。

訪問中、アウクスブルク大学や職業訓練校を視察し、現地の学生たちが主体的に学びを深める姿が非常に印象的でした。

また、ホストファミリーには同世代のホストブラザーとホストシスターがいました。ブラザーは大手ディーラーで働きながら学校での学びを続けており、休日にはプロのマジシャンとして活動するなど、多才な生活を送っていました。

一方、シスターはギムナジウムに通い、自分の選択に悩みながらも学業に取り組んでいる姿が印象的でした。

このような同世代の若者たちの姿は、教育やキャリア形成に対する考え方の違いを浮き彫りにしてくれるものでした。



(写真：職業訓練校内の介護実習室)

ホストファミリーとの交流

滞在中、ホストファミリーと共に過ごすことで、日常生活の中に根付く文化や価値観を学ぶ機会がありました。

例えば、冷蔵庫にあるものを活用した簡単な夕食や、同じテーブルであっても料理をシェアしない習慣など、日本とは異なる生活リズムや価値観を体感しました。

また、ホストファミリーとの会話を通じて、家庭生活や個人の考え方における文化的背景をより深く知ることができました。

こうした日常の体験は、異文化理解の基盤となるだけでなく、国際交流において、言語の壁を乗り越えること以上に言語以外の方法で相手とのつながりを築く力が求められることを学ぶ貴重な経験となりました。

国際交流イベント

訪問中、副市長表敬訪問や送別会など、公式イベントが複数開催され、これらの場では、私たちが尼崎市や日本を代表する立場として挨拶を行う機会がありました。

現地の方々と交流する中で、自分たちの街や文化に対する誇りを再確認するとともに、外からの視点で自文化の良さを再発見する場面も多くありました。

これらの経験を通じて、自己理解が深まるとともに、シビックプライドを感じる機会にもなりました。

2. 現地での学び

文化を「知る」から「感じる」へ

アウクスブルク市での体験を通じて、異文化理解の本質は、単なる知識の吸収ではなく、体感を通じた理解にあると感じました。

ホストファミリーとの生活や市内の散策では、日常生活の中で文化がどのように息づいているのかを肌で感じる事ができました。特に、食事や生活リズムの違いを実際に経験する中で、文化が人々の暮らしに影響を与えていることを体感しました。

若者の視野を広げる国際交流の意義

国際交流の意義の一つは、多様な価値観に触れることで、自分自身の視点を広げられることにあると考えます。

現地の若者やホストファミリーとの交流を通じ、異なる価値観やライフスタイルに触れることで、自分が当たり前だと思っていた価値観や固定観念を見直すきっかけとなり、多様な考え方を受け入れる柔軟性が養われました。

日本との比較が生む気づき

ドイツの教育制度や市民生活に触れる中で、日本社会との違いについても考えさせられました。

ドイツでは、学生が早い段階から自分の進路を選択し、その選択に責任を持つ文化が根付いています。

一方、日本では画一的な教育制度や進路選択が一般的であり、若者が主体的に将来を考える機会が限られていると感じました。

また、職業訓練を通じて実践的なスキルを身につける仕組みや、多様な選択肢を尊重する社会的風土は、日本が学ぶべき点だと考えました。同時に、日本の教育制度が提供する基礎教育の幅広さや、全体の底上げを目指す仕組みにも強みがあることを再確認しました。

このような違いに触れることで、日本社会における選択肢の多様化や柔軟性の必要性を考える機会に繋がり、若者が主体的に物事に取り組むきっかけになると考えました。

3. 若者が国際交流で得られる学び

アウクスブルク市での体験と学びを基に、若者が国際交流で得られる学びを三つの視点でまとめました。

多角的な視点で体感的な異文化理解

若者が国際交流で得られる学びの一つは、異文化理解です。

アウクスブルク市では、フッガーライで社会福祉の歴史を知り、ノイシュヴァンシュタイン城では過去の人々の夢や野心に触れる機会がありました。また、テキスタイ

ル博物館では繊維産業を通じて街の経済的發展を学び、水道施設では自然を活用した地域社会の工夫を知ることができました。さらに、「Halle 116」では戦争の記憶を学び、歴史を忘れないことの重要性について考えさせられました。

このように、多角的な視点から学ぶことで、一つの街や文化に対する理解がより深まり、五感を通じてその場の空気や背景を感じ取ることで、多面的な学びが得られると考えます。

自文化を再発見する機会

二つ目は、自文化を再発見する機会です。

アウクスブルク市訪問中、「尼崎では～／日本では～」と説明するたびに、普段は意識していなかった自分の街や文化の良さに気づくことができました。

さらに、相手の興味やポジティブな反応を受け、自文化への愛着や誇りが自然と高まるのを感じました。

また、自文化を他者に伝えるためには、それを正確に理解し、自分なりの言葉で表現する力が求められます。この過程を通じて、自文化を外から見直す視点が養われました。

国際交流は、こうしたプロセスを通じて自文化を再発見するとともに、シビックプライドを醸成する貴重な機会を得られると考えます。

言葉を越えた人の繋がり

三つ目は、現地の人々との交流を通じて築かれる「言葉を越えた人の繋がり」です。

現地で生活する人々や施設を案内するガイドとの対話を通じて、文化や価値観の背景を深く知ることができました。

特に、ガイドが語る街の歴史や個人的なエピソードには、誇りや愛情が込められており、それが人としての交流を深める鍵となりました。

言語や文化の違いを超え、相手を尊重しながら築く関係は、知識を超えた学びを得る原動力です。

こうした「人本来の繋がり」を体験することが、異文化を受け入れる柔軟な感覚を得られることに繋がったと考えます。

おわりに

今回のアウクスブルク市訪問を通じて、異文化理解の重要性を改めて実感するとともに、国際交流が若者に与える多くの学びを体験しました。

これらの経験は、私にとって大きな財産であると同時に、尼崎市の若者が地域や国際社会で活躍するためのヒントを得る貴重な機会でした。

今後は、この学びを基に、国際交流を通じて多様な価値観に触れる機会を広げ、多くの若者が地域や社会の発展に貢献できる環境づくりに努めていきたいと考えます。

本報告書がその一助となれば幸いです。